
ライト

小室未来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライト

【Nコード】

N2909B

【作者名】

小室未来

【あらすじ】

菜種ミヤビはバスケット命！の中学生。幼馴染みの恭平との恋や女装した超美形少年に好かれるなどハチャメチャスクールラブコメディです！！

1：ミヤビ&恭平

「ミヤビ」起きなさい！今日から中学生でしょー！恭平君来てるわよ」

現在朝8時

「うるさいなあ…」

「起きろ！！！！このバカミヤビ！！！！」

「うおい！！！！？？？」

いきなり母と違う声がして体がベッドから落ちる。

「恭平！！いきなり大きな声ださないでよ！！」

「こゝでもしなきゃお前起きねーからだろ??」

声の主は幼馴染みの藤谷恭平だった。

恭平は嫌そうにミヤビのスクールバックの中にペンケースをほおり入れた。

「ここが中学かあゝ」

手を額につけ、桜が枚散る中に建っている学校を口もとを笑わせながら見た。

「お前部活何入る？」

「もち！」

「バスケ部！！」

見事にハモった。

小さい頃から私はバスケットに熱中していて小学校でも一番うまかったと思う、それに私にとってバスケットは生きがいだ。暇があったら公園で必死にボールを叩いていた、そのせいでつき指が耐えなかった。

それでもバスケットはやめられなかった。

つき指が痛む時には

ああ…自分はバスケットがうまくなってるんだあって嬉しかった。

「恭平もバスケット部？」

「じゃねーの？お前一人じゃ危なっかしいし」

「……」

危なっかしいって……

ひどっ……！！なんか……言い返せない自分がめちゃくちゃムカツ

く……

「なに？反応なし？……あ！！もしかして嬉しいとか！？」

「そんなんじゃないし」

そんなわけないし。

だって恭平のことはただの幼馴染みで、ただのバスケット仲間なだけだしなあ……

「恭平なん組？？」

入学式が終わったあとには待ちに待ったクラスひょうが見れる。

人でぎゅうぎゅうにされながら恭平の服の裾をつかんで上を見た。

私は1年2組、恭平は5組。

「えっと…ミヤビちゃんだよね？」

「ん？？」

うわ……！！可愛い子……！私より少し小さいな…

「そうだけど…名前何て言うの？？」

「……えっと樋口^{ましろ}雪っていうのよろしくね」

雪ちゃんか…でもなんで私の名前知ってたんだろ？？

そんなことを思いながらまた外の桜を眺めた

今日から中学生なんだなあ…

少し大人になったような気がして無意識に笑顔になる。

- - - - 放課後

「知ってるか？最近強盗が多いらしいってよ」

「強盗？？」

恭平にオゴってもらったソフトクリームを口に運んで顔をひきつけた。

「気をつけるよ、近所で多いらしいんだってさ、お前ノロマだからな」

「はいはい」

コーンを食べてピースを恭平に向けた。

恭平とは同じマンションで二階の201が私で202が恭平の家だ。

「「ただいま」」

家が向かえだから声がハモる。

学校に行つて帰りには私が恭平がお菓子をオゴつて家に帰る時には声がハモつて夜に窓からおやすみをいうのが私と恭平の1日のプログラムだった。

「ミヤビ、部屋のかだつけしなさいよー」

「はい」

新品のゲームをしながら自分の部屋のドアを閉めた。

「でもなあ……」

おもわずため息がでるほどミヤビの部屋は散らかっていた。

かだつけをしようにもするきがせず、唯一物が乗っていないベッドの上に上がつてゲームに目を向ける。

「きゃー……！！！！！！」

「はいっゝ！！！？？？」

おっ……お母さんの声だ……

でも度が過ぎてない……；；；

「どうしたん??」

ゲームを持ったままリビングのドアを開くとそこには全身黒い服を来た強盗がナイフを片手に金を母に要求しているではないか。

「だっ……誰??」

見ての通り、強盗だ。

「殺されなくなかったら金をだせ！！！」

ミヤビは啞然としていた、何故マンションを選んだのだろう。沢山の人がすんでいるのにバカだ、ミヤビはポケットから携帯を取りだして110番を押した。

「あゝ警察ですよね??今家に強盗が来てるんですよ……場所は北区のマンションの二階よりしくね」

「……」

母も強盗もぼーぜんとしていた、ミヤビは携帯を切るとゲームのスタートボタンを押してリビングのドアを足で閉めた。

「ちょっとまでこのガキーっ!!」

「ちょっとまで???アンタさ、この家私ん家なだけど??」

「……???」

ナイフをミヤビに向けながらマヌな力才をみせる。

「勝手に上がりこんで金出さなきゃ殺すって勝手すぎだが!死ぬ!……」

ミヤビの足が強盗の腹に直撃した。

とーぜんたる。その後警察が駆けつけ強盗がつかまったのは言うまでもないだろう……

1：ミヤビ&恭平（後書き）

初連載です！！！！

うまいとは言えませんがこれからがんばって書いていきます！！！！
応援よろしくお願いします！！

小室未来

2：ゲームと恋心

「えゝ…売り切れですかあ??」

先日家に入ってきた強盗に蹴りを入れて一時期有名人となった菜種ミヤビです。そんな私もふつうの女子中学生なわけでした…ただバスケが人より好きただけなんです、でも一応子供としてゲームっていう趣味も持つてるんだよ?ただのバスケオタクではないよ???

「せっかく早起きしたのに…」

もんだいはそのゲームの新作RPGが売り切れだったんですよ…

しかたなく店内を後にする。歩いてる時でさえ、回りには新作のゲームのチラシやらハタやらウザったいものが目に入ってくる。

「ゲーム手に入らなかったし…」

そう呟いて来週から部活が始まることを思いだしたのだ。

「部活に入ったら…ゲームする時間…減るかな??」

くだらない心配をしているミヤビであった。

「ただいまー」

もう靴を脱ぐのもめんどくさくて、玄関の出っ張りに靴のかかとをつけてぬぐ。

「ハア…」

ため息を一つするとつき指が目にはいる。

来週から部活始まるし…練習でもしに行こうかな?

部屋のボールを手に取り公園に向かう。

「あれ?恭平??」

「ミヤビ?どした??」

公園には一足先に恭平がボールを叩いていた。

「何だよ、今日は新作のゲームの発売日って言ってたのに…」
「うーれーきーれー!!」
言葉の最後と一緒にゴールに入れた。

「だろーな、あのゲームおもしろーってCMでやってたし」
「私もそのおもしろさを体験したかったです」

棒読みに言った言葉におもわず苦笑してしまう、予約を入れておけばいいものを…

「何よ」

「別に」

小さく笑いながらボールを叩く。「部活楽しみか?」

「もちろーん!!!こわい先輩以外はねー」

歯をみせて笑う。

「部活…がんばれよな」

「恭平もね」

笑いながらボールを叩いた。
でもバスケットに夢中になりすぎて帰った時間は星が出ていて、私も恭平もしかられました…;;

「おはよー!!!」

「おはよ、ミヤビちゃん」

「おはよー!!えーっと……………雪ちゃん!!」

約五秒考えてやっと名前思い出したよ…存在感ないなあ…可愛いのに。

「ミヤビちゃんはバスケット部?」

「うん、バスケット好きだからね」

そう言った私に雪ちゃんは穏やかな笑顔を見せ、がんばってねといってくれた。

ありがとう雪ちゃん、でもなんだか初めてそういつてくれた気がしないよ…どうしてかな?

「ミヤビ!!!部活遅れるって!!!」

放課後、教室を掃除してる私の所に荒い息をして恭平が大きな声で叫んできた。

「マジ!?ごめん!!先に行く!!」

手に持っていたほうきを目についた男子に押し付け、急いで体育会に向かった。

「すみません!!」

二人で頭を同時に下げた。

今私はめちゃくちゃこわい。

だってバスケの部長……………背かなりでけえ……………!!!!!!
部活の初日なのに遅刻するなんて最悪だあ……………;

部長の顔もろくに見れずに、必死に頭を下げた。

「まあ…いい、明日は遅刻するなよ」

「あ…」

「ありがとうございます…」

二人で苦い顔をしながら部長を見上げた。

……………あれ??背が高くて声も低かったから顔もものすごくこわいんだろって思ってたのに……

すごいカッコイイんですけど！

「おいミヤビ??」

ど…どうしよう…タイプ…!!!!

「きいてますかあ??」

恭平なんか目じゃない!!これがマジ恋ってやつ!?

「シカト…??」

絶対手に入れてやる…!!!!

「部長!よろしく願いしますっvv」

「え?」

「ちよつとまでえvvv!!!!」

菜種ミヤビ。この恋マジです。

2：ゲームと恋心（後書き）

第2話です……

なんだか意味不明になってきています……こんな小説ですができれば感想待っています!!

3：憧れているんだよ

「部長おゝゝお疲れ様ですう」

ねこなで声で部長にタオルを渡す。

いやゝ今日も部長かつこいいゝ

バスケもできてしかもこんなカッコイイ人のサポートできるなんて私ったら一石二鳥ゝ

「おい、バスケもしろバスケも」

「なに、アンタは男子でしょ、シッシッ」

恭平を追い払ってドリブルをしながら部長を見つめる。

はうゝゝカッコイイ…

足長いなあ…手足も細いし、バスケもうまいなんて…

私の幼馴染みとは大違い…

恭平の身長は…私と同じだし、成績も同じだし、顔もそんなにいいなんて言えないし…部長が私の幼馴染みならとくに付き合ってたのに！

「なんでよりによってこんなダメ男かなあ??私の幼馴染みは…」

はあゝ乙女の悩みは尽きない…

「ミヤビー」

「何ー?？」

ベッドの上でポテチを口に運びながらマンガのページをめくる。

「もうちょつとでお兄ちゃんが帰ってくるから部屋の掃除しておき

なさいよー」

「はいっ！……!?」

ちよっ……ちよっちよっちよっ……お兄ちゃんが帰ってくる!!!?
?聞いてないよ!!!

「えっ!!!ちよっ…それってマジ!!!??」

「マジよマジ…早くしなさいよー」

や……やばい!!!この部屋お兄ちゃんに見られたらぜったいバカにされる!!!

足の踏み場がないほどにマンガやら雑誌が散らかっている自分の部屋を見ておもわず青ざめる。

「い……やあ……!!!こっとなったら死ぬ気で掃除するしかないっ!!!」

「ふう……やっと終わった…」額の汗をぬぐって一つ息を吐いた。

ピンポン

あ、帰ってきたよ、帰ってきましたよ。菜種家唯一のイケメンお兄ちゃんが帰ってきたよ。

軽い足取りで部屋のドアを開いて細い隙間から玄関を見つめた。

「おかえりなさい。真乙」

「ただいま母さん」

長身に綺麗な茶色い髪、ミヤビは変わっていない真乙に見とれていた。変わったところといったら彼女ができたとかいうことと、黒いスーツに身を包んでいるということだった。

「お…かえり、お兄ちゃん」

「ただいまミヤビ」
大きな手でミヤビの頭を軽く撫でる。

いつまでも子供扱いして…これでもれっきとした中学生なんだよ？？
リビングに向かって行くお兄ちゃんの後ろ姿を見ていると、なんだか寂しい気持ちになっちゃうよ……お母さんも出来損ないの私より社会に出て立派に仕事をしてるお兄ちゃんの方がいいよね……
もともとお兄ちゃんが高校生の時バスケット部に入ってたから私もバスケットを始めるようになったんだっけ……

「そうだ母さん、卵焼き作ってよ」
「はいはい、真乙は卵焼き好きだものね…ミヤビも食べるでしょ？？」

「え！！？うん、もちろん！！お母さんの卵焼き大好きだもん…」
お兄ちゃん。

「母さん砂糖入れすぎじゃない？？」
「そんなことないわよ？？」

お兄ちゃん。

「……………ミヤビ？？」
「……………」

どこにも行かないでね。

「どうしたんだよ急に泣き出して……」

「だってお兄ちゃんが先にいつちゃうから…」

「……………???.?」

勉強もできて、スポーツもできて自慢ができるカッコイイ人。

「……………」

「勉強もできないブスでも…お兄ちゃんは私を妹にしてくれる??.?」
こんな私でも……………」

「うん。ミヤビはオレのたった一人の妹だよ」

ありがとう。お兄ちゃん、貴方も私のたった一人のお兄ちゃんだよ。

3：憧れているんだよ（後書き）

ミヤビのお兄ちゃん真乙が登場しました！！！！読み方はマオです♪
今回も話が変わりますよね……………

これからがんばって最新したいと思ってます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2909b/>

ライト

2011年1月30日15時21分発行